

落合 直文 — 短歌を多くの人に広める —

父君よ 今朝はいかにと 手をつきて 問ふ子を見れば 死なれざりけり

「お父さん、今朝の体調はどうですか、と礼儀正しくたずねるわが子を見ると、この子のためにも病気で死ぬわけにはいかない」という意味の短歌です。自分が重い病気でありながら、わが子のことを思いやる作者のやさしい気持ちが伝わってきます。百年以上も前に詠まれた短歌ですが、作者の思いは今の時代の読者にも、手に取るようにわかります。この短歌の作者が落合直文です。

落合直文は、明治時代に活躍した歌人・国文学者です。明治時代は何もかもが変わり、いろいろなことが進歩した時代でした。文学においても、西洋からきた新しいものももてはやされていきました。一方、日本独自の詩である短歌は長い伝統にしばらくは、決まりきった表現が多いため、しだいに多くの人から好まれなくなっていました。

直文は、文久元（一八六二）年に、松崎村片浜（現在の気仙沼市）で、鮎貝家の次男として生まれました。幼名を亀次郎といい、十四歳のころ、国学者の落合直亮の養子になりました。幼いころから本が好きで、短歌や文章を書くことがたいへん得意でした。そのような直文は、家族から仙台で学校の教師か神官になることをすすめられましたが、きっぱりと断りました。歌人や国文学者として仕事をしていきたいと考えていたからです。短歌や国文学を新しい時代に合ったものに発展させることが、自分がすべき仕事なのではないかとも考えていたのです。自分の名前を直文としたのは二十六歳のころです。「文」の字に、文学で生きていくという気持ちを表したと考えられています。

国文学者…
日本の文学を研究
する学者。

神官…
神社で神につかえ
る仕事をする人。
神主。

直文は、いつも短歌がもっと多くの人に親しめるものになってほしいと願っていました。そのころ、短歌の世界では、昔からのかたちを守ろうとする旧派と、西洋から入ってきた言葉を使うとする新派が対立していました。旧派は、昔からのかたちを何も変えずに守ろうとしていましたが、そればかりでは読む人々があきてしまいます。一方、新派は目新しい表現や言葉を使うとしていましたが、まだまだよい短歌を作ることができていませんでした。どちらにもよいところを見直すべきところがありました。しかし、どちらも相手のよいところを認めずに言い争いを続けていたのです。このようなことでは、短歌がよりよくなることも、多くの人が親しめるものになることもありません。直文は、すべての歌人や学者、短歌愛好家が力を合わせる必要だと考えていました。そのことを繰り返していったのでした。

それだけではなく、直文は、新しい時代にふさわしい短歌を自分たちで作り上げていこうと考えました。そのために作ったのが、浅香社という短歌のグループでした。このグループには、直文の考えに賛成する若い歌人が集まりました。そこで、短歌を作ったり、作った短歌をよりよく直そうと話し合ったりしました。浅香社は、短歌の革新運動の中心となりました。

直文は、弟子たちにいつもこう話していました。

「自分自身の短歌を作りなさい。昔の人や今の人のまねをしてはいけません。もちろん、わたしの歌をまねするのはいけません。一人一人が自分のよいところを伸ばすようにしなさい。」

そのころ、直文と同じように短歌の革新運動をしていた正岡子規という歌人がいました。子規は、新聞に随筆を連載していました。歌人らしく短歌を取り上げることが多いので、直文も子規の随筆を読むことをとても楽しみにしていました。その連載の中で子規は、短歌がすぐれているかどうかは、作者の評判や流派には関係がないと述べていました。そして、短歌のよしあしを決めるには、みんなで意見を出し合って、話し合うことが大切だとも述べていたのでした。

革新：
新しく変わることを。

随筆：
見たり聞いたりしたこと、経験したことなどを自由に記述した文章。
エッセーともいう。

連載：
続けて、新聞などに記述がのること。

ある日のこと、直文は、子規の病気がひどくなって、りんごをすってしぼったジュースのようなものなどいとのどを通らなくなったことを知りました。直文は、子規のことを心配して、何かしてあげられないかと考えていました。ちょうどよいことに、直文のふるさとからりんごが送られてきました。つやつやとした大変りっぱなりんごです。直文は、すぐにこのりんごを果物の好きな子規に送ってあげようと思いました。近くにいた弟子たちも、おみまいにりんごを送ることは、いい考えだと思いました。

ところが、その日の新聞を読み始めた直文は、じっと目を閉じ、考えこんでしまいました。直文は、子規の随筆を読んだのでした。そんな直文の様子に気がなった弟子たちも新聞を読みました。

子規の書いた内容は驚くべきものでした。そこで直文は、自分の短歌が「変な歌」、「わかりにくい歌」であると書かれていたのを目にしたのです。その上、言葉を変えれば少しはよくなると、厳しく批評されていたのでした。弟子たちは、これでは直文がりんごを送ることをためらうのもしかたがないと思いました。弟子たちが子規の記事を読んだことを伝えると、直文はうなずきながら、

「せっかく、子規がわたしの短歌をよくしようとして批評しているのだから。」

とおだやかに話したのでした。弟子たちは、はっとしました。直文は少し困ったような顔をしていましたが、決しておこっていたのではなかったのです。直文はこのようなきでも、自分が願っていること、いつも考えていることを弟子たちに伝えたのでした。



そして、今、りんごを送ったのでは、子規が遠慮して連載をやめてしまうのではないかと考えたのでした。

直文はりんごに目を向けながら、子規の病気が早くよくなると思います。そして連載が終わったら、このりんごを子規に届けるつもりであることを話しました。

ところが、次の日も、その次の日の新聞にも、直文の短歌を批評する子規の連載が続いていました。とうとう、りんごはかごに入ったままいました。結局、直文は子規にりんごを送ることができませんでした。

直文は、すっかり悪くなってしまったりんごを、やはりおだやかな目で見つめ続けました。



落合直文（気仙沼市煙雲館（直文の生家）所蔵）

落合直文

落合直文は、文久元（一八六一）年、松崎村片浜（現在の気仙沼市）に生まれた。明治二十一（一八八八）年、「孝女白菊の歌」という新体詩を発表し、全国的に有名になった。明治二十二（一八八九）年、森鷗外とともに新声社を作り、近代詩に大きな影響をあたえた訳詩集『於母影』を刊行した。明治二十六（一八九三）年、浅香社を作り、近代短歌を開くもとなる和歌革新運動を行った。